
3rdworld

Craft

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3rd world

【序文】

N3315F

【作者名】

Craft

【あらすじ】

現実でもない、非現実でもない、三番目の仮想現実。そこで様々
な出会いや経験は決して擬似的なものでなく、かけがえのないもの
となっていく。

第一章 訪問者

「…ただいま」

家の玄関のドアを開け独り言のように呟くと、淳はそのまま自室のある一階へと続く階段を駆け上がりついた。

「おーい、ヒツカヒツカ」

そのとき、突然家の自分を呼ぶ声に足を止める。

淳は肩をすくめると、手にもつた通学用のカバンを一先ず階段に置き、声がしたリビングへ向かつた。

彼の名前は結城淳。

都内の私立大学に通う学生で、現在はこの家で一人で暮らしていた。就活を控えたこの時期にも関わらず、両親が離婚裁判中という頭痛の種でしかない夫婦喧嘩の延長に付き合わされていたためだ。

「辰巳叔父さん、来るときは連絡して下さいよ? ビックリしたなあ」
リビングの硝子ドアを開けるなり、ソファーアームchairに座る人物に文句を言う。

「すまんすまん、どうじても急な用事があつてな」

辰巳叔父さんと言われた男は、眼鏡を掛け無精髭を生やした中年だった。

「…お久しぶりです。急な用事つて何ですか?」

ぞんざいな挨拶をすると、淳は着込んだコートを脱いで彼の横に座る。

「明日のつけの試験の事。それより珈琲が飲みたいなあ？淳君
「…はいはい、気付かなくてすみませんね」

テーブルのある電気ポットの電源を確かめ、インスタントコーヒーを入れる準備をする。

「明日な、俺が送迎することになった。朝8時に来るから寝坊するなよ
「もしかしてウチの大学の生徒を全員拾つてから？」
「ああ、まあ5人だからそう早めに出る必要は無いけどな。お前、準備は？」

辰巳は胸ポケットから取り出した煙草を口にくわえる。

「してませんよ。VRの中だし準備なんか…」

その動作を見て灰皿を渡すと、辰巳は軽く頭を下げてライターで火を点けた。

「……お前な、せっかく内部情報教えてやったのに。ゲームやってるか？」
「サーフィンですか？最近忙しくて…それに5年前のプロトタイプなわけですし…」

辰巳はがくんと首を垂れると、横に振つて続ける。

「本気で受かる意思あるのか？今年は受験者数4桁はいつたらしい

ぞ？」「

目の前に座る、煙草を吹かしながら憔悴しきつた顔をしているこの人は、ゲーム業界最大手の企業に在籍し、開発部門の主任を勤めている。

その辰巳が5年前に趣味で開発したサードワールドというやく用オンラインRPGにて、淳は高校生の頃見事にハマってしまい、将来の道の第一進路にしていた。

「もちろんですよ。ゲーム経験者は僕と佐藤だけですし、伊達に何百時間も費やしてないですからね」

「佐藤…ああ、あの天才君か。俺はお前が心配だよ」

「今日もアソシと後で相談するつもりです。きっと、辰巳叔父さんから情報引き出したか？って電話来そうですし…珈琲ビーブル」

熱湯を注いだカップから、珈琲の独特な香ばしいかおりが部屋を漂い始めた。

「あの子は本当貪欲だからなあ、誰かさんと違つて
「だから嫌いなんですよ…効率重視の考えが
「そう無下にするな。幼なじみだろう？」

辰巳は目を閉じて珈琲の香を楽しむと、そう言った。しかし淳はどうしても素直に受け取れず、眉をひそめてしまつ。

「……さて、そろそろ休憩時間も終わりだな。じゃあ仕事に戻るわ

腕時計を確かめた後で、彼は立ち上がり告げた。

「珈琲飲んでないじゃないですか、それに夕食は？」

「仕事の関係で食欲無いんだ。接続型VRも副作用は大きいな
「……あんまり無理しないで下さいよ。辰巳叔父さんに引導を渡す
のは僕なんですかね？」

「はっはっは。ともかく明日は頑張れっ！」

大きな口で笑うと、辰巳は淳の肩を軽く叩いた。
そして、じゃあとだけ残して静かに帰つていった。

「残念。だつて聞き出してないもん。ただでさえ試験内容の事を知つてるんだし、これ以上は卑怯だよ」

「お前なあ……俺はともかく、筆記試験の点数悪かつたんだろう? 大丈夫かよ」

アツシの声はいかにも残念そうで、しかしそれを隠すように話題を変えたように聞こえた。

「大丈夫じゃない? あ、それより受験者数4桁だつて! なんか楽しみだね」

「……少なく見積もつて1000人のプレイヤーか。入社試験つて言うより、もうオンラインゲームだな」

淳とアツシが志望する辰巳の企業は、独自の入社採用試験を実施していた。

筆記試験と適性試験の一通りだ。

適性試験はVRヴァーチャルリアルの中で行われる試験であり、五感を備えた仮想空間を味わえるとあって記念受験者も多い。

しかし実際には間接型VRと呼ばれるものが採用されているため、仮想空間の中での出来事は記憶も何も全て体感することが出来ない仕組みになっている。

「勿体ないよなあ、接続型ならもっと面白くなりそうなのによ!」

「……仕方ないよ。辰巳叔父さんも言ってたけど、まだ接続型は人體に及ぼす影響が計り知れないから」

今思えば、辰巳叔父さんは少し痩せたのかもしない。あの時は全然気づかなかったが、昔は食べることが生き甲斐のような人だった。それなのに仕事で接続型を導入したと聞いてから、何だか元気が無くなってきていた気がする。

「……辰巳さん、そんなに眞呂悪そだつたのか？」

「んー今考えれば。…明日は、つちの大学の受験者全員迎えに来るみたいよー。」

無意識に頭に浮かんだ不吉なイメージを振り払つかのよつて、語氣が強くなってしまった。

「ああ、聞いた聞いた。…お前、他のメンバーにバラしてないよな？…サードワールドの」と

アツシの思いがけない言葉に、顔が歪む。

「話してないよ。友達じゃないし…それにしてもアツシは氣にしきだよ？」

「そうだな。いや、悪い。でも辰巳さんは俺にとつても憧れの人だからね。どうしても試験パスしたくて

「まあ、そうだね」

素つ気ない返事をすると、椅子から移動してバタンとベッドに倒れ込んだ。

アツシはすぐに謝る奴だ。でもそれは反省しての謝罪ではなく、非を認めたアピール。長い付き合いで淳にはそれが分かっていた。

「はあ…試験か…サードワールドが理想通りの世界だといいね？」

一人が遊んだことのあるプロトタイプは、VRが生まれる前の作品であるため、VRを通しての一次元だった。それでも十二分に乐しかったけれど。

「…ああ、そうだな。ついこちや覚えてるか？あの…」

その後はサーディフルの思い出話に華が咲いてしまい、結局電話を切つて眠りこなしたのは明け方過ぎになっていた。

再会

「うわ…綺麗だなあ…」

頭上には雲一つない快晴の青空がどこまでも広がり、眼前には新緑の香りと共に風に吹かれてなびく草原が地平線の彼方まで続いていた。

それでも記憶が無い。

それでも何故僕はこんな大平原に立っているのだ？

断片的には残つてはいるが思い出せるのは、辰巳叔父さんの案内で試験会場の研究所に行つたところで途絶えしまつている。

「……もしかして…」ジジがサーデワールドの中？

確かにそれなら幾分か納得する」とが出来る。

「うん… そう割り切るしかないよね…」

ジュンはもう独語すると、自分の体を確かめた。

「思いつきRPGの初期装備ってカンジだね」

服装は簡素な麻布で作られたもので、腰には銅製の短剣がさしてあつた。

試しにそれを鞘から引き抜いてみると、切れ味は悪そいで装飾も施されてない。

「そう言えば…仮想空間のはずなのに視覚も聴覚も嗅覚も…五感全

てここまで再現出来るなんて凄いや…

軽く屈伸や準備運動などをしてみたが、全く違和感はなかった。ぐつと息を止めて腰を捩つた瞬間、後ろに何か建物のようなものが見えた。

「んっ…あれ? 何だろ? 堀つ建て小屋…?」

特に目的も現状では無く、とりあえずその小屋に向かって歩き始める。しかし段々と気分が高揚し始め、いつの間にかジュンは走り出していた。

「はあ…はあ…なんか…気持ちいいなっ」

現実には滅多に味わえない世界。高層ビルも煩い自動車も存在しない、新鮮な空気と清々しい風が体を包む。

「どーちゃくつ!…へえ、意外と大きいな」

遠くからは大して大きくもない急ぎ仕事で作られた小屋に見えたが、目の前に立つと一家族が生活出来そうなログハウスだった。

「…お邪魔します…」

そつぬいて入口の木製の扉を押し開くと、奥でガタンと物音がした。

「…誰だ?…あれ? もしかして…ジュンか?」

中から聞こえた声は、聞き覚えのあるものだった。

「やつですが… つてアツシー!？」

静かに部屋に入ると、ジューンと同じ服装をしたアツシが笑顔で立っていた。

「ああ、良かった。随分はやく会流出来てさ」

「だね。けどアツシ違くない? 久々だからかな」

茶色く染めた短髪、眼鏡を掛けた端正な顔立ち。身長もジューンと同じぐらいで体格もリアルと変わらなかつたが、どこか雰囲気が違つた。

「多分VRの中だから補正掛かつてるんだろ。そう言つお前もかつてよくなつてるし?」

「…はいはい。でもやつぱりこいつてVRなんだ?」

いやいやしてじるアツシを無視して、会話を続ける。

「あ? 何言つてるんだ。ちやんと説明あつたら? ほりイテアとかいうAIから」

「何それ… 全然覚えてないよ… こきなり草むらに突つ立つてたよ…」

「ははは、脳天気な奴。とりあえず座れ」

やや埃が積もつた屋内には、机や椅子などの家具が一式あつた。その一つにアツシが跨がつて、反対の椅子を指差す。

「えーと、まず何から説明するか… あ、VRなりではのアレか

やつぱりと彼は右手を前に突き出し、指を鳴らした。

「ここれがPW。パーソナルワイヤンドウ 所謂メニュー画面な。出してみ?」

アツシの田の前に突然青い窓枠が現れる。それを見倣つてジュンも指を鳴らしてみたが、何も起きない。

「ん？ あー そうそう。指は関係ない。心の中でPWって唱えるだけ」

嫌な顔でアツシを見返したジュンは、面倒くさがりながらPWと陔く。

すると、軽い電子音がして半透明な画面が浮かび上がった。アツシのPWが半透明に見えなかつたのは、多分他人から見えないようにするためなんだろうと思つた。

「ステータスやら色々載つてるから、後で教えるよ。と言つてもイデアから離つたのはこれだけだが」

ジュンの耳にはそんな言葉は届かず、何度もPWを出ししたり閉めたりしていた。

始まりの街

「ねーアツシ、まだかかりそう?」

ジュンとアツシは出合ったログハウスを出て、街道と思わしき畦道あぜみちを歩いていた。

理由はいくつがある。

一つは活動拠点としては何もかもが足りなかつた。家具一式と二階には寝具があつたが、食糧などは一切なかつた。それに初期装備の短剣では狩りに行く気もしない。

二つめは目的。

アツシが言うに、基本がプロトタイプと同じならば、必ず RPGなりの「ゴールがあるはず」とのこと。序盤でのんびりして他のプレイヤーに差をつけられるのは、彼がもつとも嫌悪する行為だ。

「それ5分前にも聞いた。さつき看板があつたんだからつい言わず歩く!」

「はいはい。まあでも散歩でも気分は良いよね」

小一時間ほどは歩き通しだつたが、やはりVRならではの幻想的と比喩できれいな世界を歩くのは楽しい。

「のんき本当暢気な奴。俺だけなら走つてゐるのに」

アツシは軽く愚痴ると、前を向いて黙々と歩みを進める。

「そんなこと言つたつてさ…」

時は數十分前に遡る。

元々せつかちなアツシが、徐々に歩く速度を早めるものだからジュンが負けじと追い越し、追い越されを繰り返すうちに走り始めた。

結局は二人とも全速力になつてしまつたが、突然何故かジュンだけ急に動けなくなつて地面に倒れこんでしまつた。

原因はステータスだ。この世界では、移動速度や攻撃速度は敏捷という数値で補整され、行動限界値は持久力に依存している。

「魔法タイプの僕が物理タイプの君に勝てるわけないじゃんか…」

PWではステータスが二つに大きく分類されている。筋力・持久力・敏捷・感覚の身体特徴と、魔法技術の生成・収束・操作・特性。総数値が前者が高ければ物理タイプ、後者なら魔法タイプと二人は呼んでいた。

「…まあな。俺も悪かったよ。後半はお前に頼りがちになるんだしな」

「でも考えてみるとプロトタイプとこの世界は色々違ひがあるね。前作ったキャラ育成方針とかもまた考えなきゃね？」

「だろ？ そうだよな？ 俺はやっぱ物理タイプは…」

この手の話にはいつもアツシは食いついてくる。

まだ始まつたばかりだし、ここで気まずい雰囲気は遠慮したかったジュンは仕方なくこの話題をふつた。

……長くなるし途中から訳分からなくなるけど、まあ暇潰しにはいいかな。

アツシを適当に頷いたり聞き流しているうち、ようやく目的地へと辿り着く。

辺境の街エスニア。

そこは大陸の極東に位置し、この世界に訪れた旅人達が休息や装備の支度をするために出来た、都までの言わば中継地点。

「ふう…やつとここかあ」

「ああ。あの時はここからスタートだったから苦労しなかったよな」

「それにしても寂れてるね、こんなとこだっけ？」

簡単な杭で紡がれた木枠が囲むその小さな街は、建物も数えるほどで、道行く人影すら辺りには見えない。

「……ちょっと早く着き過ぎたのかもな」

アツシは景観を楽しむジュンを置いて、一人で黒い看板を掲げた店へ入ってしまった。

「ちょっとー? 置いていくなよお

慌ててジュンもアツシについて店の中へ続いた。

「いらっしゃいっ！あんまり品揃えは良くないが見つて下さによつ！？」

店の中は木製の上に置かれた様々な武器や防具があり、奥から活気のある店主の声が聞こえる。

「あー…装備を揃えたいんだが…」

二人が店主のいるカウンターまで行くと、急に彼の顔付きが変わった。

「あんつ？なんだ、随分弱つちい旅人だな」

頭部の禿げた褐色の肌を持つ中年の店主は、そつそつとじろじろとジュン達を見回した。

「…ね、あの人NPC？」

「…多分な。スゲーリアルだけど」

NPCとはノンプレイヤーキャラクターのことで、RPGによく出ててくる『むらびとA』や、こんな店の主人を指す。基本的には指示された行動しか出来ず、プレイヤー達の旅のフォローをする存在。

「…ま、いいか。客人には変わりねえ。これが商品」

なんともふてぶてしい態度で彼は一人の前に購買画面を開いた。

……なんてNPCだ。実はプレイヤーじゃないの？
そつ思い、ジュンは画面ではなく店主を凝視する。

「あのや、俺ら1000EHルドしかないから、その金額で絞つてくれないか？」

どうやらアッシュが見た画面には、とても一人が買うには高価過ぎるアイテムばかりだったらしい。

「おつと悪いな。お前さん達のような旅人には手が出せねえか」

またもや憎まれ口を叩きながらも、店主はアッシュの意図を察して画面を操作した。

「…無難な片手剣より、やっぱ両手剣かな……でも必要筋力値高いな…ジユン、お前は？」

「えつ？ああ…僕は短剣かな。魔法タイプだし」

購買欄に提示された武器の中で、唯一必要筋力値がない短剣しか装備出来そうになかった。

「なんだ？お前達、必要筋力値の定義も知らんの？」

いきなり大きな顔を押し出して、NPCにはジュン達の会話に参加し始めた。

「必要筋力値ってのは、あくまで規準だ。自分のステータスが越えてなくても装備はできるぞ？」

「へえ…デメリットは？」

「ある。筋力値が足りなければそれだけ重く感じて行動限界値に達

しゃすい。あと多少ダメージにも轟が出る

その言葉を聞くと、アッシは「やつと笑い、ジュンに頭を下げた。

「金貸してくれつー！」

「はい？」

唐突な申し出にニヤニヤか画面からジュンだが、彼が指差す画面を見て納得した。

「なるほど。両手剣は1500ELOなんだ。短剣は…安つ、200つで…」

「安いがお前さんの腰にぶら下げたそれより、よっぽど上等な品だぞ」

また店主が首を突っ込んでくる。

「……わかったよ。じゃあ会計してください」

渋々ア承すると、ジュン以外の一人は満足そうな笑顔をしてくる。
……店主よ、アンタ本当にNPCなのか?、ある意味関心するよ。

「まじどあつづーーー！」

店主が大声をあげると、ジュン達のPWが自動展開して購入アイテムを表示した。

短剣【アイアンダガー】

必要筋力値0

攻撃力4

耐久性 50 / 50

材質：鉄

グレード：C

「あの…グレードって何ですか？」

アイテムの一一番下に書かれた文字を見てジュンが聞いた。プロトタイプには、こんな表示は無かつたはず。

「そいつはギルドの決めた品質ランクだ。Cは金属、Bは鉱石、Aは合金。店やプレイヤーが作ったアイテムには表示されるんだよ」「じゃあマイナスは？」

「魔法耐性だ。マイナスの武器は魔法が付与出来ないが、プラスなら魔力を込めればその武器の力を発揮出来る。」

なんとなく理解が出来た。マイナスは通常品、プラスはマジックアイテムということだ。

「ま、プラスなんて滅多に出ない。モンスターからのドロップか、遺跡の出土品ぐらいだろうな。尤も、モンスターでドロップにはグレードが付かんから効果も不明だがよ」

そう言って店主は手元にあつた煙草に火を点けた。

「よし…おっさん、色々とありがとな。俺ら行くわ」

「やうだね…えっと、ありがとうございました」

武器だけで防具は一切新調出来なかつたが、このNFCとのやり取りのお陰で知らない情報も得られたため、一人にとつては有意義な会話に感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3315f/>

3rdworld

2010年10月28日05時01分発行